

永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2020 年 3月

「闘争と勇氣」「生ける宮（Ⅱ）」「いのちの目的」「ねぎ餅」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

生ける宮 (II)

4

聖書の教え

朝のマナ

闘争と勇気

8

Conflict and Courage

現代の真理

「いのちの目的」

40

わたしたちが信仰の一致に到達するまで

力を得るための食事

「ねぎ餅」

46

レシピ

お話コーナー

「カルバリー (I)」

48

イエスの物語

【正丸教会】

〒368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465

【高知集会所】

〒780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2
電話：088-831-9535

【沖縄集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

アクセス www.4angels.jp

メール sdarm.shomaru@gmail.com

発行日 2020年2月2日

編集&発行 SDA改革運動日本ミッション

〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Dreamstime on Front page, Sermon View
on page 44

Printed in Japan

教会の大いなる必要

わたしたちの間における信心の真のリバイバルが、わたしたちのすべての必要のうちで最大にして最も緊急なものである。これを求めることがわたしたちの第一の働きであるべきである。主の祝福を得るための熱心な努力がなければならない。それは神がご自分の祝福をわたしたちの上に与えたくないからではなく、わたしたちがそれを受ける準備ができていないからである。…告白、へりくだり、悔い改め、そして熱心な祈りによって、神がご自分の祝福をわたしたちに与えてくださると約束された条件を果たすことが、わたしたちの働きである。リバイバルは祈りの答えとしてのみ期待される必要がある。民が非常に神の聖霊に欠乏している間は、み言葉の説教を感謝することができない。しかし、御霊の力が彼らの心に触れるとき、与えられる説教は、効果を及ぼさずにはいない。神のみ言葉の教えに導かれ、御霊の現れをもって、健全な分別を働かせて、わたしたちの集会に出席する人々は貴重な経験を得て、家に帰り、健全な感化力を発揮する準備ができるようになる。

昔の旗手（標準を掲げる者）は祈りのうちに神と格闘することが何かを知っていた。そして聖霊の注ぎを享受した。しかし、彼らは活動の舞台から下りて行った。そしてだれが彼らの場所を埋めようとしているであろうか。起ころうとしている世代はどうであろうか。彼らは神へと改心しているであろうか。わたしたちは天の聖所で行われている働きに対して目覚めているであろうか。あるいは、わたしたちが起きる前に教会に何か押し迫る力が及ぶのを待っているであろうか。わたしたちは教会全体がリバイバルするのを希望しているであろうか。その時は決して来ない。

教会には、改心しておらず、真剣な勝利する祈りにあつて一致しようとしぬ人々がいる。わたしたちは個人個人で働きに入らなければならない。わたしたちはもっと多く祈り、もっと少なく語らなければならない。…もしわたしたちが自分自身の心を探り、自分たちの罪を捨て去り、自分たちの悪の傾向を正すなら、自分たちの魂が虚栄に高ぶることはない。わたしたちは自らに信頼せず、自分たちの充足は神からであるという永続的な自覚を持つ。

わたしたちは外からよりも内からの方がはるかにもっと恐れるべきものがある。力と成功への妨害は世からよりも教会自体からのほうがはるかに大きい。不信者たちは神の戒めとイエスの信仰を守ると公言する人々に、その矛盾のない生活によって、また彼らの信心深い模範と活発な感化力によって、彼らの代表しているみ事業を促進し導ぶために、ほかの種類の人々よりももっと多くのことをなすと期待する権利がある。しかし、なんとしばしば真理を擁護すると公言する人々が、その前進を妨げる最大の障害物であることが判明することであろう！…（*レクテッド・メッセージ* 1巻「16章リバイバルへの召し」より 121, 122）

第15課 生ける宮(Ⅱ)

最も良い食べ物は何か？

「... 良い物を食べ...」(イザヤ 55:2)。

主は、エデンの園においてアダムとエバに食物を供給された時、最も良い食べ物を与えてくださいました。「神はまた言われた、「わたしは全地のおもてにある種をもつすべての草と、種のある実を結ぶすべての木とをあなたがたに与える。これはあなたがたの食物となるであろう。」(創世記 1:29)。

最初に指定された食物は、果物、穀物、および木の実でした。罪がこの世に入り込んだ後、人間は、地を耕すことになりました。その時から、彼らの食物には野菜が加わりました。「地はあなたのために、いばらとあざみとを生じ、あなたは野の草を食べるであろう。」(創世記 3:18)。

最上ではありませんでしたが、肉を食べることが許可されたのは、洪水後でした。洪水前には人間の平均寿命は900歳を超えていました(創世記5章)。洪水後、人間の体と平均寿命は急速に劣化した。ノアの世代からほんの2、3世代後には、平均寿命は70歳ほどに減少しました。(詩篇 90:10)。肉を食べることの結果は、たちまち明らかになりました。

肉を食べることが許可されましたが、肉を用いるにあたり、明確な制約が設けられていました。「しかし肉を、その命である血のままで、食べてはならない。」(創世記 9:14)。

また、「清い」動物と「汚れた」動物の間に区別が設けられました。「清い」ものだけが食物に適しているのです(レビ記 11章参照)。清い動物とは、基本的には割れたひづめを持つ反芻する動物でした。

洪水の後、肉を食べることが神に許可されたものの、動物の内在的な病気や、動物をほふるのに用いられるいくつかの方法によって生じる結果のため、今日、肉食をやめるべきことは明らかです。神の御目的は、わたしたちが可能な限り、最初の食事に戻ることである。聖書は、わたしたちに対して次のように教えています。「酒にふけり、肉をたしなむ者と交わってはならない。」(箴言 23:20)。「肉を

食わず、酒を飲まず、そのほか兄弟をつまづかせないのは、良いことである。」（ローマ 14:21）。

ダニエルの体験は、肉食をしない食事の利点を例証しています。彼と彼の友人が正しい食事の諸原則に従ったために、神が彼らを祝福されたことに注目しましょう。

「ダニエルは王の食物と、王の飲む酒とをもって、自分を汚すまいと、心に思い定めたので、自分を汚させることのないように、宦官の長に求めた。…そこでダニエルは宦官の長がダニエル、ハナニヤ、ミシャエルおよびアザリヤの上に立てた家令に言った、「どうぞ、しもべらを十日の間ためしてください。わたしたちにただ野菜を与えて食べさせ、水を飲ませ…てください。さて、王が命じたところの若者を召し入れるまでの日数が過ぎたので、宦官の町は彼らをネブカデネザルの前に連れていった。王が彼らと語ってみると、彼らすべての中にはダニエル、ハナニヤ、ミシャエル、アザリヤにならぶ者がなかったので、彼らは王の前にはべることとなった。王が彼らにさまざまな事を尋ねてみると、彼らは知恵と理解において、全国の博士、法術士にまさること十倍であった。」（ダニエル 1:8, 11, 12, 18-20）。

わたしたちは何を飲むか？

飲酒は、聖書の中で非難されています。ビール、ワイン、ウイスキー、リキュール、あるいはそれに類する飲み物は、決してクリスチャンの唇を通るべきではありません。「酒は人をあざける者とし、濃い酒は人をあばれ者とする、これに迷わされる者は無知である」（箴言 20:1）。「わざわいなるかな、彼らは朝早く起きて、濃き酒をおい求め、夜のふけるまで飲みつづけて、酒にその身を焼かれている」（イザヤ 5:11）。

他の人に飲酒をすすめる人に対してはのろいが宣告されています。「わざわいなるかな、その隣り人に怒りの杯を飲ませて、これを酔わせ、彼らの隠し所を見ようとする者よ」（ハバクク 2:15）。

天の御国に酒に酔う者のための場所はありません。

「貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者は、いずれも神の国をつぐこととはないのである」（コリント第一 6:10）。

紅茶、コーヒーは、神経を弱める刺激物です。胃の神経が興奮し、刺激が脳

へ伝えられ、今度はこれによって心臓の活動が増すことになり、体全体につかの間のエネルギーが与えられます。疲れが忘れられ、力が沸き起こるように思えます。また、知力が目覚め、想像力が活発になります。

これらの効果により、多くの人々は、紅茶やコーヒーが自分たちにとってとても益になると感じます。しかし、それは間違いです。刺激物の影響が消え、不自然な力が弱まると、その結果は倦怠感と疲労です。これらの神経に対する刺激物を継続的に使用すると、頭痛、不眠、心臓の動悸、消化不良、震え、および他の病状を引き起こすことがあります。

水：健康の時も病気の時も、純粋な水は、天から与えられた最も素晴らしい祝福の一つです。これは、動物や人間の渴きをいやすために神が与えてくださった飲み物です。水を制限なく摂取すると、体組織の必要を満たすのを助け、自然が病気に抵抗するのを助けます。

ハーブ茶やフルーツジュースもまた、健康を促進するすぐれた飲み物です。

タバコや麻薬

比較的に弱い麻薬の中毒になると、より強い麻薬の使用へ誘われます。

麻薬中毒や睡眠薬の使用が、近年、憂慮すべき速さで進行しています。多くの若者が、麻薬の常習というわなにかかり、早い段階でやめられないかぎり、わたしたちの社会にあまりにも蔓延している悲しい結果へ至る例が多発しています。

過去においては、タバコの使用は害がないと考えられていました。その後、医学的な研究により、タバコによる害は、生じるスピードが遅く潜在的であるものの、最悪であることが証明されてきました。タバコの影響は遅く、また最初はほとんど感じられないため、特に危険なのです。タバコは、神経を興奮させ、その後、麻痺させます。タバコは頭脳を弱めます。タバコの使用は、飲酒を誘います。タバコの使用は高価であり、不潔で、使用する人に有害であり、他者にも害を与えます。タバコを吸う習慣の犠牲者は、病院や手術室で数多く見られます。タバコの煙は、肺がんや咽喉がんの原因の過半数を占めており、また心臓病やその他の重大な病気を引き起こします。

タバコを吸う人は、その習慣をやめない限り、新しくされた地に立つ聖都に入る資格を有することはありません。「しかし、汚れた者や、忌むべきこと及び偽りを行う者は、その中に決してはいれない。はいれる者は、小羊のいのちの書に

名をしるされている者だけである。」(黙示録 21:27)。

節制

神は、わたしたちに何が良い物で何が有害であるかを明らかにしておられます。多くの人々は、「わたしたちがこれらのものをほんの少々用いる事は、節制している限り、害にならない」と言います。

節制の本当の意味は何でしょうか。害のあるものすべてを絶ち、また、良いものを適度に用いることです。

「あなたがたは知らないのか。競技場で走る者は、みな走りはするが、賞を得る者はひとりだけである。あなたがたも、賞を得るように走りなさい。しかし、すべて競技をする者は、何ごとにも節制をする。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするが、わたしたちは朽ちない冠を得るためにそうするのである。そこで、わたしは目標のはっきりしないような走り方をせず、空を打つような拳闘はしない。すなわち、自分のからだを打ちたたいて服従させるのである。そうしないと、ほかの人に宣傳伝えておきながら、自分は失格者になるかも知れない」(コリント第一 9:24-27)。

わたしたちは、自然を少しだけだましても、その結果を免れることができると信じたくなるかもしれませんが。しかし、聖書はどのように述べているでしょうか。「まちがってはいけない、神は侮られるようなかたではない。人は自分のまいたものを、刈り取ることになる」(ガラテヤ 6:7)。

闘争と勇気

Conflict and Courage



3月

短い7年間

「こうして、ヤコブは七年の間ラケルのために働いたが、彼女を愛したので、ただ数日のように思われた。」(創世記 29:20)

彼〔ヤコブ〕の到着は、約百年前に、アブラハムのしもべが到着したときとは、状態がなんと異なっていたことであろう。しもべは、らくだに乗った多くの召使をつれ、金銭とりっぱな贈り物を持って来た。ところがむすこは、旅につかれた旅人として、つえのほか何の持ち物もなく、たったひとりでやってきた。ヤコブも、アブラハムのしもべのように、井戸のかたわらで休んだ。そして、彼が、ラバンの妹娘のラケルに会ったのはここであった。井戸から石を取りのけ、家畜に水を飲ませる手伝いをしたのは、今度はヤコブであった。ヤコブは、自分が彼らの親類であることを話して、ラバンの家庭に歓迎されることになった。彼は、持ち物も、供の者も連れずにやってきたが、わずか数週間で彼の熱心さと熟練さが認められて、長く滞在するように勧められた。こうしてヤコブは、ラケルを妻にめとるためにラバンのために七年間働くことになった。

昔、結婚の契約が正式に認められるに先だって、花婿はその身分に応じて、いくらかの金銭またはそれに相当する物品を、妻の父に手渡す習慣であった。これは、結婚関係の安全を保つものと考えられていた。……それでも、妻のために支払うものを何も持っていない者を試みる方法が設けられていた。彼らは、納入すべき結納金の額に応じて、きめられた期間、愛する娘の父親のために働くことが許された。求婚者が忠実に任務を果たし、他の点でもりっぱであることを証明すれば娘を妻にすることができた。そして、一般には結納金として父が受け取ったものは、結婚のときに娘に与えられた。……

古代の習慣は、時おり、ラバンのように悪用するものはあっても、よい結果をもたらした。求婚者が妻を得るために働かなければならなかったことは、早婚を防ぎ、家族をささえる能力とともに、その愛情の深さをもたえすよい機会であった。今日はこれと全く反対なので、多くの悪い結果が生じている。結婚に先だって、お互いの習慣や性質などについて知る機会ほとんどない場合が多い。そして、日常生活については全く他人同然で式をあげてしまう。彼らが互いに適合していないことを発見したときは時すでにおそく、その結婚が一生悲惨な結果に終わるものが多い。(人類のあけぼの上巻 202 - 205)

3月2日

生死にかかわる事柄

「その人は言った、『夜が明けるからわたしを去らせてください』。ヤコブは答えた、『わたしを祝福してくださらないなら、あなたを去らせません』。」(創世記 32:26)

ヤコブは、その生涯の大きな危機に当面した時に、ひとり離れて祈った。彼は品性を変えていただきたいという切なる願いを心にいだいていた。(祝福の山 179)

そこはものさびしい山地で、野獣がひそみ、盗賊や人殺しが出没するところであった。ヤコブは、ただひとりでなんの防備もなく、深い悲しみに沈んで地にひれ伏した。……彼は、真剣な叫びと涙をもって神に祈った。すると突然、力強い手が彼の上におかれた。彼は、敵が彼の命をねらっているのだと思い、敵の手からのがれようと全力を尽くした。暗黒のなかで、両者は必死に争った。ヤコブは一言も言わなかったが、全力を尽くして一瞬でも力をゆるめようとしなかった。こうして、必死の戦いをしながらも、彼は罪の意識に心が重かった。彼の罪が彼の前に立ちはだかつて、彼を神から引き離すのであった。しかし、この恐るべき窮地にあつて、彼は神の約束を思い起こした。そして、彼は真心から、神のあわれみを哀願した。格闘は夜明け近くまで続いた。見知らぬ相手の指がヤコブの腰に触れるや、彼はたちどころに不具者になってしまった。ヤコブは、この敵がだれであるかがわかった。彼は天使と戦っていたことを知った。彼のほとんど超人的力でも勝てなかったのはそのためであった。このかたは、「契約の天使」キリストで、ご自分をヤコブに現わされた。不具となり、激しい痛みに苦しみながらも、ヤコブは、彼を放そうとしなかった。……

天使は、……「夜が明けるからわたしを去らせてください」と言ったが、ヤコブは答えて、「わたしを祝福してくださらないなら、あなたを去らせません」と言った(創世記 32:26)。もしこれが、ヤコブの高慢無礼で自己過信から出たものであれば、彼は、直ちに滅ぼされたことであろう。しかし、それは、自己の無価値を告白するとともに、神が忠実に約束を果たされることを信頼する者の確信であった。(人類のあけぼの上巻 214, 215)

ヤコブは自分の力で懸命に得ようとして得られなかったものを、自己放棄と確固たる信仰によって得たのであった。(祝福の山 180)

ヤコブの悩みの時

「悲しいかな、その日は大いなる日であって、それに比べるべき日はない。それはヤコブの悩みの時である。しかし彼はそれから救い出される。」(エレミヤ 30:7)

キリストが、人間のための仲保者の働きを終了されるとき、この悩みの時が始まる。そのときに、すべての人の運命が決定され、罪を清める贖いの血はもうないのである。……すると、神の霊の制御力が地から取り除かれる。ちょうど、ヤコブが、怒った兄エサウに殺されそうになったのと同様に、神の民も彼らを滅ぼそうとする悪者に生命を脅かされる。そして、ヤコブがエサウの手から救い出されることを一晚中祈ったように、義者は彼らの周囲の敵からの救済を日夜祈り求める。……

この苦悩のときに、ヤコブは天使を捕えて涙ながらに訴えたのである。すると、天使は、彼の信仰を試みるために、彼の罪を思い出させて、彼からのがれようとした。しかし、ヤコブは天使を行かせなかった。彼は、神があわれみ深いことを知っていたので、神のあわれみによりすがった。彼は、自分がすでに罪を悔い改めたことをさし示して、切に救いを願い求めた。ヤコブは、その生涯をふりかえってみると絶望するばかりであった。しかし彼は、天使を捕えてはならず、苦悩の叫びをあげて真剣に願い求め、ついに聞かれたのである。

神の民も、悪の勢力との最後の戦いにおいて、これと同じ経験をするのである。神は、神の救出力に対する彼らの信仰、忍耐、確信を試みられる。サタンは、彼らの絶望的であること、そして、彼らの罪は大きすぎて、許しを受けることはできないと思わせ、彼らを恐怖に陥れようとする。彼らは、自分の欠点を十分知っていて、その生涯をふりかえってみれば、絶望である。しかし、彼らは、神の大きなあわれみと自分たちの真心からの悔い改めを思い出す。そして、無力な罪人が悔い改めるときにキリストによって与えられる神の約束を懇願する。彼らの祈りが直ちに聞かれなくても、彼らの信仰はくじけない。彼らは、ヤコブが天使を捕えたように、神の力をしっかり握って、「わたしを祝福してくださらないなら、あなたを去らせません」と心から言うのである。(人類のあけぼの上巻 218 - 220)

3月4日

保証された勝利

「あなたが神と人との、力を争って勝ったからです。」(創世記 32:28)

もし、ヤコブが欺瞞によって長子の特権を獲得した罪を、前もって悔い改めていなかったならば、神は彼の祈りを聞き、彼の命をあわれみのうちに保護なさることはできなかった。それと同様に、悩みの時においても、神の民が恐怖と苦悩にさいなまれるときに、告白していない罪が彼らの前に現われてくるならば、彼らは圧倒されてしまうであろう。絶望が彼らの信仰を切り離し、神に救済を求める確信を持てなくする。しかし彼らは自己の無価値なことを深く認めるけれども、告白すべき悪を隠していない。彼らの罪は、キリストの贖罪の血によってぬぐい去られていて、彼らはそれを思い出すことができないのである。……

罪の弁解をして隠そうとするもの、そして罪を告白せず許されないまま、天の記録に罪を残しておく者は、みな、サタンに打ち負かされる。彼らがりっぱなことを言い、栄誉ある地位にあればあるほど、彼らの行為は、神の前にいまわしく、大いなる敵は確実に勝利を収める。

しかし、ヤコブの生涯は、罪に陥っても真に悔い改めて神にたち帰る者を、神は見捨てられないことを証明している。ヤコブが、自分の力をふるって獲得できなかったものを得たのは、自己降伏と堅い信仰によってであった。こうして、神は、彼の熱望した祝福を与え得るものは神の能力と恵みだけであることを教えられた。最後の時代においてもこれと同様である。彼らは危険に当面し、絶望に陥るとき、ただ、贖罪の功績だけに頼らなければならない。……

……そうする限り、だれ一人滅びることはない。……

ヤコブは、不撓不屈の精神を持っていたから祈りが聞かれた。……今こそわれわれは、神に聞かれる祈りと不動の信仰についての教訓を学ばなければならない。キリストの教会にとって、また、個人個人のクリスチャンにとって最大の勝利は、才能や教育、あるいは富、または人間の援助によって得られるものではない。その勝利とは、神との交わりの部屋で熱心に苦闘する魂が、信仰によって力強いみ腕をつかむときに得られる。(人類のあけぼの上巻 220, 221)

再会

「互に情深く、あわれみ深い者となり、神がキリストにあってあなたがたをゆるして下さったように、あなたがたも互にゆるし合いなさい。」(エペソ 4:32)

ヤコブが天使と格闘している間に、もうひとりの天使がエサウのところに送られた。エサウは夢のなかで、父の家から二十年の間離れて暮らした弟を見た。また、彼が母親の死を知って、どんなに悲しむかを見た。そして彼が、神の軍勢に囲まれているのを見た。エサウは、この夢を兵卒たちに語った。そして、彼の父の神がヤコブと共におられるから、彼に害を加えないように命じた。

ついに、戦士をひきつけたさばくの族長の一隊と、妻子や羊飼いたち、侍女たち、それに多くの家畜や羊の群れを従えたヤコブの一団とが、両方から接近した。ヤコブはつえによりすがりながら、戦士の一団に近づいた。彼は前夜の格闘のために、顔は青ざめ、からだの自由を失い、痛みに耐えながら、休み休み足を運んだ。しかし彼の顔は喜びと平和に輝いていた。

からだの自由を失った彼を見て、「エサウは走ってきて迎え、彼を抱き、そのくびをかかえて口づけし、共に泣いた」(同 33:4)。エサウの荒武者たちの心も、この光景に強く心を打たれた。エサウが彼らに夢の話をしてはいたものの、彼らは首領の心の変化を理解することができなかった。彼らは、ヤコブの弱々しい姿を見た。しかし、この彼の弱さが、彼の力の原因であったことを知ることはできなかった。

ヤコブは、破滅が目前に迫って、ヤボク川のほとりで苦闘した夜、人間の助けのむなしさと、人間の力に頼ることの不安定さとを教えられた。彼は、唯一の援助は神から来るべきであることを悟った。しかも彼は、その神に対して恐ろしい罪を犯したのであった。彼は、自分の無力と無価値とを認めて、罪を悔い改める者に神が約束されたあわれみを願い求めた。彼が神に許され、受け入れられたことを保証するものはこの約束であった。天地は過ぎ去っても、この言葉は必ず成就する。あの恐ろしい格闘のときに彼をささえたのはこれであった。(人類のあけぼの上巻 216-218)

3月6日

別々の道

「御子を信じる者は永遠の命をもつ。御子に従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまるのである。」(ヨハネ 3:36)

ヤコブとエサウは、父の臨終の床で出会った。かつて兄は、このときをふくしゅうの機会にしようとしていたのであったが、その後、彼の気持ちは大きく変わった。そして、ヤコブは、長子の特権の霊的祝福に満足して、父の富の継承を兄に譲った。エサウが求め尊んだ遺産もこれだけであった。……

エサウとヤコブは、同じように神の知識を授けられた。そして、ふたりは自由に神の戒めの道を歩いて、神の恵みにあずかることができたのである。しかし、彼らは、ふたりともそうはしなかった。ふたりの兄弟は、異なった道を歩き、彼らの道はさらに広く大きく別れていくのであった。

神が独断的選択を行ない、エサウを救いの祝福から閉め出されたというようなことはない。神の恵みの賜物はキリストによって、すべての者に分け隔てなく与えられている。人間が減じるのは、自分自身の選択によるのであ……

おそれおののいて自分の救いを達成しようとする者はみな選ばれている。武器をまとして、信仰のよき戦いをする者は選ばれている。目をさまして祈り、み言葉を研究し、誘惑からのがれる者は選ばれている。常に信仰を持ち、神のみ口から出るすべてのことばに従おうとする者は選ばれている。贖罪に必要なことがらはすべての者に無代で与えられている。贖罪の成果は、条件に応じる者に与えられる。

エサウは契約の祝福を軽べつした。彼は霊的利益よりは、物質的利益を高く評価した。そして、彼は望んでいたものが与えられた。彼が神の民から離されたのは、彼自身が故意にそう選んだのであった。ヤコブは、信仰の遺産を選んだ。彼は、策略と欺きと偽りによってそれを手にしたが、神は、彼の罪が矯正されていくことをお許しになった。……

彼の品性の卑しい性質は、炉の火で焼かれ、真の金が精練されて、アブラハムとイサクの信仰が、なんのかげりもなくヤコブのうちに見られるようになった。(人類のあけぼの上巻 226-228)

もめ事のある家庭

「兄弟たちは父がどの兄弟よりも彼を愛するのを見て、彼を憎み、穏やかに彼に語ることができなかった。」(創世記 37:4)

ヤコブの罪とその罪への一連のできごととは、悪影響を及ぼさないわけにはいかなかった。それは、彼のむすこたちの性質とその生涯に苦い実となってあらわれるにいたった。このむすこたちが成人したころ、彼らの性質に重大な欠点があった。一夫多妻の結果が家庭内に明らかに見られた。この恐ろしい悪は、愛の源泉そのものを枯らし、その影響は最も神聖なぎずなを弱める。数人の母のねたみは、家庭の関係をみじめなものにした。子供たちは争い合い、他からのさしずを受けるのをきらって成長した。そして、父親の生涯は心労と悲しみにおおわれ、暗くなった。

しかし、ラケルの長男ヨセフは、著しく異なった性質の持ち主であった。彼のまれに見る容貌の美は、彼の精神と心の内面的美の反映であった。ヨセフは純粋で、活動的で、歓喜にあふれていた。そして、道徳的にも真剣で堅固な性質をあらわしていた。彼は、父親の教えに耳を傾け、神に従うことを愛した。……母親がなくなっていたために、彼は、父親に強い愛着をおぼえた。そして、ヤコブの心は、年をとってから生まれたこの子と強く結ばれていた。彼は「他のどの子よりも」ヨセフを愛した。

しかし、この愛情さえ、悩みと悲しみの原因になった。不覚にも、ヤコブはヨセフに対する偏愛を表面にあらわして、他のむすこたちのねたみを起こさせた。

……

……高価な上衣を、ヤコブが無分別にもヨセフに与えたことは、さらに父親の偏愛を示すものと思われて、年上の兄弟たちをさしおいて、ラケルのむすこに長子の特権を授けるのではないかという疑念をさえ起こさせるのであった。ある日、少年が、彼の見た夢を彼らに語ったために、彼らはますますヨセフを憎んだ。

……

ヨセフが兄弟たちの前に立ったとき、彼のりっぱな顔は、聖霊の啓示の光に輝いていたので、彼らは称賛せずにはおれなかった。しかし、彼らは、自分たちの悪行を捨てようとはせず、自分たちの罪を責める彼の純潔さを憎んだ。カインの心を動かしたのと同じ精神が彼らの心に燃え上がった。(人類のあけぼの上巻 228-230)

3月8日

靈感を受けた決意

「ヨセフは実を結ぶ若木、泉のほとりの実を結ぶ若木。その枝は、かきねを越えるであろう。」(創世記 49:22)

ヨセフは自分がエジプトに売られていくことを、わが身に起こりうる最大の災難としてとらえた。しかし父親の保護のもとにあるときは考えもしなかったほどの信頼を神に置く必要性を悟った。(SDA バイブルメンタル[E・G・ホイト・コメント] 1巻 1096)

隊商がカナンの国境に向かって南下したとき、ヨセフは遠方に父の天幕が張ってある山を見ることができた。彼は愛する父親のさびしさと苦しさを察して激しく泣いた。ふたたびドタンで起こったことを思い出した。彼は兄弟たちの怒りを見、彼らの恐ろしい目つきを身を感じた。泣き叫んで訴える彼に浴びせられた鋭いぶつ言葉が彼の耳に鳴っていた。彼は将来のことを考えて恐れおののいた。たいせつに扱われたむすこから、いやしい無力な奴隷になるとはなんとという変わりようであろう。……

しかし、神の摂理のうちに、このような経験さえも祝福になるのであった。ヨセフはわずかの時間のうちに、数年かかっても得られない教訓を学んだ。彼の父は、強くやさしい愛の人であったが、彼を特別に愛してあまやかしたことは彼のためにならなかった。この愚かな偏愛は兄弟たちを怒らせ、彼らに残虐行為を行なわせ、ヨセフを家庭から引き離す原因になった。その影響は、彼自身の性格にもあらわれていた。彼は、これまでに助長された欠点を改める必要があった。……

……彼は、父の神のことを考えた。彼は幼いときから、神を愛し恐れることを教えられていた。彼は父の天幕の中で、ヤコブが逃亡者となって家を脱出したときに見た幻の話をよく聞いたものであった。……

彼はどのような環境のもとにあっても、天の王の臣民らしく行動し、神に忠誠を尽くそうと決心して大きな感動をおぼえた。彼は、専心、主に仕えようと思った。彼は勇敢に試練に当面し、忠実に義務を果たそうとした。この一日の経験が、ヨセフの生涯の分岐点になった。その恐ろしい不幸が、あまやかされた少年から、思慮深く、勇敢で沈着なおとなに彼を変えたのである。(人類のあけぼの上巻 234, 235)

祝福された協力

「主がヨセフと共におられたので、彼は幸運な者となり、……その主人は主が彼とともにおられることと、主が彼の手のすることをすべて栄えさせられるのを見た。」
(創世記 39:2, 3)

エジプトに到着したヨセフは、パロの侍衛長ポテパルに売られてそこで十年間仕えた。ここで彼は非常に大きな誘惑に会った。彼は、偶像礼拝のただ中にいた。偽りの神の礼拝は、王宮のあらゆる栄華に取り巻かれ、当時最高の文明国の富と教養にささえられていた。しかし、ヨセフは彼の純真さと神への忠誠を保った。彼の周囲には、至るところに罪惡の光景や物音があつたが、彼はそれを見ようとも聞こうともしないのであつた。彼は、禁じられた問題を考えないのであつた。彼はエジプト人の好感を得ようと望んで原則を隠すことをしなかった。もし、彼がそうしたならば、試練に負けたことであろう。しかし彼は、父祖の信仰を恥と思わず、自分が主の礼拝者であることを少しも隠そうとしなかった。

……ポテパルのヨセフに対する信任は日ごとに増し、彼はついにポテパルの家令に任じられ、財産を全部ゆだねられた。

ヨセフにゆだねられたものが、すべて驚くべき繁栄をもたらしたことは、直接奇跡が行なわれたためではなかった。それは彼の勤勉と管理と活動に対して、天からの祝福が加えられたのである。ヨセフは、この成功を神の恵みに帰し、偶像礼拝者の主人もそれがこれまでにない繁栄の秘訣であることを認めた。ところが、目的に向かつてたゆまず努力をするのでなければ、成功を収めることはできない。神は、神のしもべが忠実であることによって栄光を受けられた。神を信じる者の純潔と高潔とが、偶像礼拝者とは著しく対照的にあらわされることを神は望まれた。こうして、異教の暗黒のただ中にあって、天の恵みの光が輝かされるのであつた。

ヨセフの温順と忠誠は、侍衛長の心を捕え、ヨセフを奴隷というよりもむしろであると思うようになった。ヨセフは、地位の高い人や学者と接し、科学、語学、社会情勢などの知識を得た。これは、彼が将来エジプトの総理大臣となるのに必要な教育であつた。(人類のあけぼの上巻 235 - 237)

3月10日

どうしてそんなことができますよう

「この家にはわたしよりも大いなる者はありません。また御主人はあなたを除いては、何をわたしに禁じられませんでした。あなたが御主人の妻であるからです。どうしてわたしはこの大きな悪をおこなって、神に罪を犯すことができますよう。」(創世記 39:9)

青年が家庭の感化と賢い勧告から離れ、新しい環境と苦しい試練に入る時、その人生は常に一番危険な時期となる。しかしもし彼が自発的に自分自身をこのように危険な立場に置かず、親の抑制から離れようとしなければ、また、自分の意志や選びではないのに危険な立場に置かれた時、力を求めて神に頼るなら、すなわち自分の心に神の愛を大切に抱きつつ信頼するなら、彼は、その試練の場に自分を置かれた神のみ力によって、誘惑に身をまかせることから守られる。神は、彼が激しい誘惑で墮落してしまうのを防いでくださる。神はヨセフの新しい住居で彼と共におられた。ヨセフは悪に苦しみつつも悪を行わないで義務の道を歩んだ。彼は着手することにはなんでも自分の宗教の原則をつらぬいたので、神の愛と守りとを得た。(手紙 3, 1897 年)

ところがヨセフの信仰と誠実とが、火のような試練に会うことになった。主人の妻が神の律法を犯すように彼を誘惑した。彼はこれまで、異教国にみなぎっていた腐敗に染まらずにいた。しかし、突然、強く、魅惑的に迫ったこの誘惑に、彼はどうしたらよいであろうか。ヨセフは拒絶すればどういう結果になるかをよく知っていた。応じればそれは秘密にされて、寵愛と報賞を受ける。反対にそれを拒めば、汚名を着せられて投獄され、殺されるかも知れなかった。彼の将来の人生のすべてがこの一瞬の決断にかかっていた。原則が勝利するであろうか。ヨセフはそれでもなお神に忠誠を尽くすであろうか。天使たちは、言葉にあらわせない不安をいだいて、この光景をながめた。

ヨセフの答えは、宗教的原則の力を示した。彼は、地上の主人の信頼を裏切ろうとしなかった。そして、結果がどうなろうと、彼は天の主人に忠実であろうと願った。多くの人々は、神と聖天使たちの目が見守っているなかで、同胞の前ではしないようなかってなふるまいをする。しかし、ヨセフはまず第一に神のことを考えた。「どうしてわたしはこの大きな悪をおこなって、神に罪を犯すことができますよう」と彼は言った。

もし、神がわれわれのなすこと、言うことのすべてを見聞きして、その言行動作をそのまま記録しておられること、そして、われわれはいつかそのすべてに当面すべきであることを常に念頭においていれば、罪を犯すことを恐れるであろう。(人類のあけぼの上巻 237)

牢獄での見習い期間

「彼の足は足かせをもって痛められ、彼の首は鉄の首輪にはめられ、彼の言葉の成る時まで、主のみ言葉が彼を試みた。」(詩篇 105:18, 19)

ヨセフの信仰深い高潔さが、彼の評判と自由を失わせることになった。これは徳が高く神を畏れる者たちが受ける、最も厳しい試練である。つまり美德が踏みにじられる一方、悪徳が栄えるように見えるのである。……ヨセフの宗教は彼の感情を穏やかに保ち、あらゆる試練にもかかわらず、彼の人々への思いやりは常に暖かく強いものであった。……獄屋生活に入るや否や、彼は自らのキリスト教的原則を実行して輝かせる。自らを他の人たちの役に立つようにし始める。……彼はクリスチャン紳士なので、快活である。この懲罰の下に、神は大きな責任、尊敬と有用性を担う状況のために彼を準備しておられた。彼は学ぶことをいとわなかった。彼は主が教えようとしておられる授業を喜んで受けた。彼はその青年期に、重圧に耐えることを学んだ。彼はまず、服従を学ぶことによって、自らを治めることを学んだ。(SDA バイブルモニター [E・G・ホワイト・コム] 1巻 1097)

ヨセフの真の品性は、この暗い獄屋の中でも輝いていた。彼は、信仰と忍耐とを堅く守り通した。彼の長年の忠実な奉仕は、ここで不当な報いを受けることになったが、彼は気分を害したり、信頼を失ったりはしなかった。ヨセフは自己の無実を自覚していたから、心は平静であった。そして、神に自分のことをゆだねていた。……

彼は、獄屋のなかでもなすべき働きを見いだした。神は、この苦難という学校のなかで、さらに偉大なことに役立つ準備を与えようとされたが、ヨセフは必要な訓練を受けることを拒まなかった。彼は獄屋のなかで、圧迫と専制の結果、また、犯罪の結果を目撃し、正義、同情、慈悲の教訓を学んだ。これが、知恵と同情をもって権威を行使するための準備を彼に与えたのである。

彼の日常生活にあらわれた誠実さ、また、悩み苦しむ人々に対する同情など、彼が獄屋のなかで行なったことがヨセフの将来の繁栄と名誉への道を開いた。われわれが他人に輝かす光は、すべて、また自分たちに反映する。悲しむ者に語るすべての親切で同情に満ちた言葉、しいたげられている者を救うすべての行為、貧しい人々へのすべての贈り物などは、それらが正しい動機から出たものであるならば、必ず祝福となってそれを与えたものにもどってくる。(人類のあけぼの上巻 238, 239)

3月12日

いつでも同じ

「あなたはそのわざに巧みな人を見るか、そのような人は王の前に立つが、卑しい人々の前には立たない。」(箴言 22:29)

ヨセフは獄屋からエジプト全国のかさねにと高められた。それは、高い名誉ある地位ではあるが困難と危険とが伴うものであった。人間は、高い頂に立てば必ず危険に会うものである。嵐は谷間の低いところに咲く花をそこなうことはないとしても、山頂にある大木を根こぎにすることがある。同様に、平凡な生活のときには廉潔を保って来た人も、世的成功と名誉に伴って誘惑に敗れて深い穴に落ちこむことがある。しかし、ヨセフの品性は、繁栄のときと逆境のときの両方の試練に耐えた。牢獄の中においてあらわされた神への忠誠は、パロの王宮に立ったときにもあらわされた。彼はこのときでさえも異教の地の他国人であり、真の神を礼拝する親族から遠く離れていた。しかし、彼は神のみ手が自分の歩む道を指示したことを心から信じ、神に常に信頼しつつ忠実に与えられた義務を果たしたのである。ヨセフを通して、王やエジプトの高官たちの注目は、真の神に向けられた。彼らは偶像礼拝を続けてはいたものの、主なる神の礼拝者の生活と品性にあらわれた原則を尊敬するようになった。

ヨセフはどのようにして堅固な品性を持ち、正しく知恵ある者としての記録を残すことができたのであろうか。彼は幼少の時代から、自分の好みよりも義務を第一にしていた。青年時代の廉潔、単純な信頼、高尚な性質が成人したのちの行動となって実を結んだ。純潔で素朴な生活が、肉体的、知的能力の両方が力強く発達するのにも有益であった。神のみわざを通して神と交わり、信仰の継承者たちに伝えられた偉大な真理の数々を瞑想することにより、ヨセフの霊的な性質は高められ、気高くされ、他のどんな研究も及ばないほどに、彼の心を広げて強くした。最も低いところから、最も高いところにいたるまで、あらゆる場所にあつて忠実に義務を果たしたことはすべての能力を最高の奉仕のために発揮する訓練となった。創造主のみこころに従って生きる者は、最も真実で最も高尚な品性を発達させることができる。(人類のあけぼの上巻 244, 245)

すべては神のご計画

「そして人に言われた、『見よ、主を恐れることは知恵である、悪を離れることは悟りである』と。」(ヨブ 28:28)

ヨセフの波乱万丈の人生は偶然ではなく、み摂理によりなされたものであった。しかし彼はどのようにして堅固な品性を持ち、正しく知恵ある者としての記録を残すことができたのであろうか。それは彼の幼年時代における注意深い訓練の結果であった。彼は自分の生来の好みよりも助言を受けた義務を第一にしていた。そして少年の純潔で、単純な信頼が成人したのちの行動となって実を結んだのである。きわめて立派な才能もそれを活用しなければ価値はない。勤勉という習慣や品性の力は養うことによって得られるのである。道徳上の美点もすぐれた知的素質も決して偶然の結果ではない。神は機会をお与えになる。成功はその活用いかんにかかっている。み摂理のはじまりをすばやく識別し、熱心にその機会を捕えねばならない。(教会への証 5 巻 321)

エジプト国民にだけではなく、この強国とかかわりのあるすべての国民に対して、神はヨセフを通してご自身を表された。神はヨセフを、すべての人々に光をもたらすものにしたいと望み、天来の光が遠くにまた近くに及ぶようにと、彼を世界最大の帝国のつかさとされた。(同上 6 巻 219)

人生における小さなことが、品性の発展にどんな影響をおよぼすかを悟っている人は非常に少ない。われわれのなすべきことで、ほんとうに小さいというものは一つとしてない。われわれが日ごとに直面する環境は、われわれの忠実さをためし、さらに大きな信頼を受ける資格がある者かどうかをためすために意図されている。平常の生活での事務や取引きにおいて原則を保ち続けることによって、心は快楽や好みよりも義務の要求を第一に考えるように習慣づけられる。このようにして訓練された心は、風にそよぐ葦のように善と悪との間にゆらぐことはない。彼らは誠実と真実の習慣をつけてきたために義務に対して忠実である。彼らは小さなことに忠実であることによって、大きなことにおいても忠実である力を得るのである。

正しい品性は、オフルの純金よりもさらに大いなる価値がある。それがなければ、だれひとり榮譽ある名声を博すことはできない。しかし、品性は遺伝しない。それは買うこともできない。道徳上の美点も、すぐれた知的素質も決して偶然の結果ではない。最も尊い賜物も、活用しなければなんの価値もない。(人類のあけぼの上巻 245, 246)

彼はキリストのようであった

「射る者は彼を激しく攻め、彼を射、彼をいたく悩ました。しかし彼の弓はなお強く」(創世記 49:23, 24)

ヨセフの生涯はキリストの生涯を代表している。兄弟たちがヨセフを奴隷に売ったのはねたみからであった。彼らは、ヨセフが自分たちより偉大なものになるのを止めようと思った。彼がエジプトに連れてゆかれたとき、自分たちはこれ以上、彼の夢に悩まされることはない、これで実現の可能性は完全になくなったと得意がった。しかし、彼らの行動はすべて神の支配のもとにおかれて、彼らが妨げようとしたできごとそのものを成就することになった。同じようにユダヤびとの祭司や長老たちは、人々の評判が次第にキリストのほうに傾くことを恐れてキリストをねたんだ。彼らは、キリストが王になることを妨げようとして彼を殺したが、かえって彼ら自身がキリストを王位につける結果をもたらしたのである。

ヨセフは、エジプトの奴隷になることによって、父の家族の救済者となった。しかし、このことは兄弟たちの罪を軽くするものではなかった。同じようにキリストは敵のために十字架につけられ、人類の贖い主、墮落した人類の救い主、全世界の支配者となられた。しかし、神がご自分の栄光と人類の幸福のために、摂理のみ手によって諸事件を支配されなかった場合と同様に、キリストを殺した人々の罪は、重かったのである。

ヨセフが兄弟たちによって異邦人に売られたのと同じく、キリストもまた、ご自身の弟子のひとりによって、最も憎むべき敵に売り渡された。ヨセフは、節操を守ったために、偽証によって牢獄に投げ込まれた。キリストも同じように、彼の自己否定の生涯が周囲の人々の罪に対する譴責となり、正しかったためにあざけられ、捨てられたのである。なんのともがも犯さないのに、偽証人の言葉によって罪に定められた。ヨセフが、不正と圧迫を受けても忍耐し、柔和であって、また無情な兄弟たちに対しても許しと高貴な寛大の精神をあらわしたことは、悪人たちのちょう笑と悪意の中にあってもつぶやくことなく忍耐し、彼を殺害した者ばかりでなく、彼のもとに来て罪を告白し、許しを求めるすべてのものを許す救い主を象徴している。(人類のあけぼの上巻 271, 272)

生きた信仰によってキリストを受け入れる者は、神との生きたつながりを持っている。……彼には神の恵み、すなわち世が買うことのできない宝である天国の雰囲気を伴う。神との生きたつながりに浴する者は、身分が低いかもしれない。しかし、彼の道徳的価値は、……ヨセフと同様に貴重なものであった。(SDA バイブルメントリ－ [E・G・ホワイト・コメント] 1 巻 1097, 1098)

奴隷であった母親

「子をその行くべき道に従って教えよ、そうすれば年老いても、それを離れることがない。」(箴言 22:6)

ヨケベデは奴隷の女であった。彼女の身分は卑しく、その重荷は大きかった。しかし世はヨケベデを通して与えられたほどの大きな祝福を、ナザレのマリヤを除いては、他のどんな女からも受けたことはない。彼女は、子供がまもなく自分の手を離れて、神を知らない人々の手で育てられなければならないことを知って、ますます熱心に、その子の魂を天に結びつけようと努力した。(教育 59)

彼女は、彼の心に神を恐れ、真理と正義とを愛するように教えこむことに力を入れ、あらゆる腐敗した影響から彼が守られることをひたすら祈り求めた。彼女は偶像礼拝の罪とむなしさを彼に示した。そして、彼が小さいときから彼の祈りを聞き、どんな危急の場合にも助けてくださるただひとりの生きた神を拝し、祈るように教えた。

母親は、できるだけ少年を自分の手もとにおいたが、彼が十二才になると手放さなければならなかった。彼はそまつな小屋からパロの娘の宮殿に連れてゆかれ、「そして彼はその子となった」(出エジプト 2:10)。彼は、ここにきても幼少時代に受けた教訓を忘れなかった。彼は母親のそばで学んだ教訓を忘れることができなかった。それらの教訓は、高慢と無神論、また、華麗な宮殿の中に暗躍する罪惡を防ぐ盾となった。

この異郷の奴隷であったヘブルの一女性の感化は、なんと偉大な結果をもたらしたことであろう。モーセのその後の全生涯、イスラエルの指導者として果たした大事業は、クリスチャンの母親の働きの重要性を証明している。これに匹敵する仕事はほかにない。母親は、子供の運命の大部分を自分の手のうちに握っている。彼女は成長中の頭脳と品性をあつかい、現世だけではなく、永遠のために働いているのである。彼女はやがて、芽を出し善悪いずれかの実を結ぶ種をまいているのである。母親は、カンバスの上に美しい姿をかいたり、大理石を彫刻しているのではなく、神のみかたちを人間の魂におしているのである。……

すべての母親は、自分に与えられている時間の尊さを知らなければならない。母親の働きは、厳粛な審判の日にためされる。(人類のあけぼの上巻 277, 278)

3月16日

正しい選択

「信仰によって、モーセは、成人したとき、パロの娘の子と言われることを拒み、罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び、」(ヘブル 11:24, 25)

モーセはエジプトの学校で最高の文武の教育を受けた。モーセの立派な容貌や体格から受ける容姿の大きな魅力、教養をつんだ知性と貴公子然たる態度、武官としての盛名—そうしたことのために彼は、エジプト国民の誇りとなった。(教育 59)

パロの王位にすわるものは、みな、神官たちの階級に属さなければならなかった。モーセは、正式の後継者であったのでこの神秘的な国家宗教を伝授されるべきであった。……

モーセは非常に勤勉でまじめな研究家ではあったが、彼を偶像礼拝に参加させることはできなかった。彼は、王位につけないかもしれないとおどかされた。また、あくまでもヘブルびとの信仰を離れずにいるならば、パロの王女から破門されるかもしれないと警告された。しかし、天地の創造主であるただひとりの神以外は何を礼拝しないという彼の決意はゆるがなかった。……

モーセは、地上の偉大な人物の中で傑出した者となり、地上の最も華麗な王国の宮殿の中でも一段と輝き、王国の権力を示す笏を持って支配するのにふさわしい者であった。彼の知的な偉大さは、各時代の偉人よりもはるかにすぐれていた。歴史家、詩人、哲学者、軍隊の指揮官、また、立法官として彼と並び得る者はなかった。しかし、彼は、こうした世界を前において、「罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び」、富、偉大さ、名誉などを得ることができる有望な将来を断固として拒む道徳的能力をもっていた。

モーセは、神が謙虚で従順なしもべにお与えになる最後の報酬について教えられた。であるから、それに比較すれば、世的な利益などはまったく無価値なものになってしまうのであった。彼らは、パロの壮麗な宮殿や王座をさし示して、モーセの心を引きつけようとした。しかし神を度外視した罪の快樂が、その堂々たる宮廷にあることを彼は知っていた。彼は、華麗な宮殿や王冠のむこうの、罪に汚れていないみ国において、至高者の聖徒たちに与えられる大きな栄光を仰いでいた。彼は、信仰によって、天の王が勝利者の頭におかれる朽ちない冠をみていた(人類のあけぼの上巻 279 - 281)

神の方法ではない

「モーセはエジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、言葉にもわざにも、力があつた。」(使徒行伝 7:22)

モーセは、エジプトの学問を身につけたことが、イスラエル人を奴隷から導き出す資格を自分に十分与えたと思った。軍隊の将軍に必要なことをすべて学んだではないか。地上にある最高の学校で最も優秀だったではないか。その通り。自分は彼らを解放することができるとモーセは思った。彼はまず自分の民の不正を正して、彼らの好意を得ようとするところから働きにとりかかった。彼は自分の同胞の一人を威圧していたエジプト人を殺した。こうすることにより、彼は初めから人殺しであった者の精神をあらして、憐れみと愛と優しさに満ちた神を代表するには不適格であることを自ら証明した。彼は初めての誘惑にみじめな失敗をしてしまった。他の多くの人のように、彼はその時すぐに神にあつての確信を失い、自分に任命された働きに背を向け、パロの怒りから逃れた。彼は自分の過ちのゆえに……神がご自分の民を残酷な奴隷状態から解放する働きにおいて、自分にはどのような役割を果たすこともお許しにならないだろうと結論した。しかし主はご自分に仕えるすべての働き人が持つ必要のある寛容、親切心、忍耐をモーセに教えることができるようにと、これらのことを許された。……

人間的には非常にほまれ高い立場にいる時に、主は、モーセが人間の知恵の愚かさ、人間の力は弱いものであることをあらわすことを許された。それは彼が、自分が完全に無力であり、主イエスに支えられなければ無能な者であることを理解できるよう導かれるためであった。(クリスチャン教育の基礎 342-344)

モーセは、エジプト人を殺したとき、父祖たちがくりかえして犯したと同様に、神がご自身でなしとげると約束されたことがらを自分の手で実現しようとする同じあやまちを犯した。モーセが考えたように、戦争によって民族を解放しようとすることは、神のみこころではなかった。それは、神だけに栄光を帰すようになるために、神の大いなる力によって実現するはずであった。しかしこうした性急なモーセの行動も、神の目的達成のために神が支配しておられたのである。モーセは、まだ、この大いなる仕事に当たる備えができていなかった。彼もまた、アブラハムやヤコブが学んだのと同じ信仰の教訓、すなわち神の約束の成就のためには、人間的な知恵や力にたよらず、神の力にたよることを学ぶ必要があつた。(人類のあけぼの上巻 282)

神の大学

「なぜなら、この世の知恵は、神の前では愚かなものだからである。『神は、知者たちをその悪知恵によって捕える』と書いてあり、」(コリント第一 3:19)

自分自身を神の共労者にふさわしい者とするために努力するにあたって、人は、主が自分に与えようとしておられる人格形成をするのに、まったく適さないような立場に、身を置く場合がたびたびある。このようにして彼らはモーセがしたように、神のかたちを身に帯びていないことがわかる。神の訓練に身を委ねることによって、モーセは主が彼を通して働くことのできる清められた通路となった。モーセは主の方法を取るために、それが不慣れなやり方、今まで試してみたことのない方法であっても、自分の方法を変えるのを躊躇しなかった。……

モーセが自分のすべての敵に打ち勝つことができたのは、エジプトの学校教育ではなく、常に変わらぬ信仰、たじろがない信仰、最も苦しい状況のもとでもなくなってしまうなかった信仰のゆえであった。……モーセは目には見えないお方を見ているかのように行動した。

神は完全な教育を受けた人を求めておられるわけではない。……主は人が神との共労者であることの特権を正しく認識すること、すなわち以前に繰り返して教え込まれた教理に関係なく、ご自分の要求に絶対服従することによってご自分をあがめる人々を望んでおられる。……

一般の学校で教育を完成させることによって、神の高貴なみ働きのための能力を身につけようと思っている多くの人は、主が自分に教えたいと望んでおられるもっと重要な教訓を学ぶのに失敗していることに気づくであろう。聖霊の感化に屈服するのを拒むことにより、また神のご要求すべてに服従しない生活により、彼らの霊的能力は弱くなってしまっている。……キリストの学校を欠席することにより、彼らは教師キリストのみ声の響きを忘れてしまっているので、この方は彼らの進路を指図することができない。人は、人間の教師が分け与えることのできる知識はすべて得ることができる。しかし神が彼らに要求しておられるもっと偉大な知恵がある。モーセのように、彼らは柔和、心のへりくだり、自己に信頼しないことを学ばなければならない。人間のために試練を負ってくださいているわたしたちの救い主ご自身が、ご自身ではなにもできないことを認識しておられた。わたしたちも、人間だけでは力がないことを学ばなければならない。人は神の性質にあずかることによってのみ、有能な者になるのである。(クリスチャン教育の基礎 345-347)

もっと価値がある

「キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる富と考えた。それは、彼が報いを望み見ていたからである。」(ヘブル 11:26)

モーセは生徒であった。彼はエジプト人の教育をすべて十分に受けていたが、彼が働くために必要であった唯一の資質はそれではなかった。神のみ摂理により、彼は忍耐を学び、激しい気性を抑制しなければならなかった。克己と苦難という学校で、彼は自分にとって最も大切なものとなる教育を受けなければならなかった。これらの試練は、彼が自分の助けを必要とするすべての人々に対して父親のように、注意を払う備えとなった。清算をしなければならない魂として、その人々を見守らねばならない人にとって、知識や学問、また雄弁は試練の時のこの経験に代ることはできない。いやしい羊飼いという仕事をするなかで、自分にまかされている群れに己を忘れて関心を持つなかで、モーセは主の牧場にいる羊の羊飼いになるという、限りある人間に委ねられた最も尊い働きにふさわしい者となった。

世にあつて神を畏れる者はこのお方に結びついていなければならない。キリストは世が今までに知っている最も完全な教育者である。このお方から知恵と知識を受けるのは、モーセにとってエジプト人の全ての教育にまさって価値のあるものであった。……

モーセの信仰は、彼が目には見えない永遠の事柄を見るよう導いた。彼は宮廷生活の華麗な魅力からそこに罪があるので離れ、滅びと破滅へ向けて喜ばせるだけの現在の良く見えるものをあきらめた。真の魅力、永遠が彼にとって価値あるものであった。モーセの払った犠牲は、本当は犠牲ではなかった。彼にとって、それは現在の表面上は喜ばせるような良い物をやり過ごして、確かで気高く不朽の良い物と取り換えることであった。

モーセはキリストのゆえに受けるそしりを、エジプトのすべての宝にまさる富と考えて耐えた。彼は、神が仰せになったことを信じ、世からのどのようなそしりにも、自分の清廉からそれるような影響を受けることはなかった。彼は神の自由人として地上を歩み……目には見えないものを見、たじろぐことはなかった。彼を引きつけたのは報いへの望みであり、それはわたしたちにとっても同じである。モーセは神と親しかった。(教会への証 4 巻 343 - 345)

3月20日

目には見えない方を見る

「信仰によって、彼は王の憤りをも恐れず、エジプトを立ち去った。彼は、見えないかたを見ているようにして、忍びとおした。」(ヘブル 11:27)

モーセには個人的な神のご臨在についての深い認識があった。彼は肉においてあらわれるキリストが来られる時代を見ていただけては、自分たちの旅の全行程の間イスラエルの子らに特別な方法で同行しておられるキリストを見た。彼にとって神は現実の方であり、彼の思いの中にいつも存在しておられた。誤解された時、危険に直面しキリストのために侮辱を受けるよう召された時、彼は仕返しをしないで耐え忍んだ。モーセは神を、自分が必要としているお方、自分が必要とするなら助けて下さるお方として信じた。神は彼にとって現在の助けであった。

わたしたちが見る信仰の多くは名ばかりの信仰であって、現実の信頼する辛抱強い信仰はまれである。モーセは自分自身の経験の中で、神がご自分をたえず求める者に報いを与えるお方であるという約束に気づいた。彼はその報いを尊重した。ここに私たちが研究したいと願う信仰に関するもう一つの点がある。神は信仰と従順の人に報われる。もしこの信仰が人生経験に持ち込まれるなら、神を畏れ、愛するすべての者は試練に耐えることができるようになる。

モーセは適切な信仰を持っていたので、神に完全に信頼していた。彼は助けを必要とし、それを求めて祈り、信仰によってそれをつかみ、神が自分を気にかけて下さっているという確信を自分の経験に織り込んだ。彼は神が自分の生涯を特別に支配しておられると信じた。彼は自分の生涯のあらゆるささいな事に神を見、神を認め、自分がすべてを見ておられる方、動機をはかり、心を試されるお方の目にさらされていると感じた。彼は神を見つめ、あらゆる形の誘惑を通して自分を朽ちない者にする力を持っておられる方として、この方を信頼した。……神のご臨在は、彼が、人間の置かれ得る最も試練にみちた状況を切り抜けていくのに十分であった。

モーセは単に神のことを考えたのではなく、神を見た。神はたえず彼の目の前におられ、モーセはそのみ顔を決して見失うことはなかった。彼はイエスを自分の救い主として見、救い主の功績が自分に着せられることを信じた。この信仰はモーセにとって推測ではなく現実であった。これがわたしたちの必要とする信仰であり、試練に耐える信仰である。ああ、わたしたちはどれほど度々イエスに目を止めていないために誘惑に負けることであろうか。(教会への証 5 巻 651, 652)

知識を得ることと捨てること

「これは、主が知恵を与え、知識と悟りとは、み口から出るからである。」(箴言 2:6)

ミデアンの荒野にモーセは牧羊者として四十年の年月をすごした。表面は一生の任務から永遠に切り離されたかのように見えながら、実は、その任務の達成のために訓練を受けていたのであった。(教育 60)

モーセは、忘れなければならないものがたくさんあった。エジプトにおいて彼を囲んでいた環境、たとえば、養母の愛情、国王の孫という高い身分、いたるところに見られる浪費、教養の高さ、鋭敏な眼識、そして、偽りの宗教の神秘性、壮麗な偶像礼拝の儀式、荘重な建築や彫刻など、すべては成長中の彼の頭脳に深い印象を与え彼の習慣や品性の形成に相当の影響をおよぼした。これらの印象をとり去ることができるのは、時間と環境の変化と、そして、神との交わりであった。モーセにとっても誤謬を捨てて真理を受け入れることは必死の激しい戦いを要した。しかし、その戦いが人間の力では耐えられないほど激しくなるときには、神が助けをお与えになるのであった。……

人間は、神の助けを受けるために、まず自分の弱さ、足りなさを自覚しなければならない。彼は、自分の中に大いなる変化が起こるように専心努力しなければならない。……多くの人は、当然得られる地位を得られないでいる。というのは、彼らが自分で実行するように神から力が与えられているのに、神が彼らのためにしてくださるのを待っているからである。……

モーセは、山々の岩壁にかこまれ、ただひとりで神と交わった。もはや、エジプトの華麗な神殿が彼の心に迷信と虚偽を印象づけることはなかった。永遠の山々の壮大ながめに、モーセは至高者の威光を仰ぎ、それとは対照的にエジプトの神々がいかに力なく、むなしいものであるかを認めた。いたるところに創造主のみ名がしるされていた。モーセは、神のみ前に立っているかのように感じ、その偉大な力に圧倒された。ここで彼の高慢と自己満足とは一掃された。荒野のきびしい質素な生活の中では、エジプトの安易でぜいたくな生活の影響は影をひそめた。モーセは、忍耐力が強く、敬神深く、謙遜な人となり、「その人となり柔和なこと、地上のすべての人にまさっていた」(民数記 12:3)。しかし、ヤコブの偉大な神を信じる信仰は強かった。(人類のあけぼの上巻 283, 284)

3月22日

神は彼を送られた

「さあ、わたしは、あなたをパロにつかわして、わたしの民、イスラエルの人々をエジプトから導き出させよう。」(出エジプト 3:10)

イスラエルの救済のときがきた。しかし、神のみこころは、人間の自尊心を傷つけるような方法でなされるべきであった。救済者は、手につえだけを持ち、卑しい羊飼いとして出て行くのであった。しかし、神はそのつえを神の力の象徴にしようとなさった。……

神の命令がモーセに与えられたとき、彼は、自信がなく、口が重く、おくびょうであった。彼は、イスラエルびとに対する神の代弁者としての、自分の不適任さを思っただけで圧倒された。しかし、ひとたびその任務を受け入れるや、主にまったく信頼を寄せ、全心をこめて働きを始めた。……神は、モーセのこのような従順な態度を祝福されたので、彼は雄弁になり、希望に満ち、落ちつきを取りもどして、人間にゆだねられた最大の働きにふさわしい人物となった。これこそ神にまったく信頼し、主のご命令に完全に従う者の品性を神が強化されるよい実例である。

人間は、神がお与えになる責任を受け入れ、全力を尽くして正しく遂行しようと願うときに、力と能力とを受けるものである。たとえ、その地位がどんなに低く、その能力にかぎりがあつたとしても、神の力に信頼し、その働きを忠実に果たそうとするものは、真に偉大なものになるのである。……

モーセは、ミデアンからの途中で、神が怒っておられるという驚嘆すべき恐ろしい警告を受けた。ひとりの天使が、モーセをおどすような態度で現われ、あたかも、彼をただちに滅ぼすかのように思われた。それにはなんの説明もなかった。しかし、モーセは、神のご要求の一つを軽視したことを思い出した。彼は、妻の言うままになって、末の子に割礼の儀式を行なうことをなおざりにしていた。……モーセは、パロに対する任務を帯びて、非常に危険な立場におかれることになった。彼の生命は、聖なる天使たちに守護されていたからこそ安全であった。しかし、当然果たすべき義務を怠っていたのでは安全ではなかった。なぜなら、彼は、神の天使たちに保護されることができないからであった。

キリスト再臨直前の悩みの時にも、義人たちは天のみ使いたちの奉仕によって守られるのである。しかし、神の律法を犯すものは安全ではない。天使たちは、神の戒めの一つでも無視する者を保護することはできないのである。(人類のあけぼの上巻 285 - 292)

主とは一体何者か

「まちがってはいけない、神は侮られるようなかたではない。人は自分のまいたものを、刈り取ることになる。」(ガラテヤ 6:7)

パロは強情という種をまき、強情という実を刈り取った。彼は自分でこの種を土にまいたのである。とうもろこしの成長に干渉する必要がないのと同様、もはや神には何か新しい力をもってその成長に干渉する必要がなかった。ただ、要求されるのは、種が芽を出して、ふさわしい実をならせるに任せることである。収穫物はどんな種がまかれたかを教えてくれるのである。(SDA バイブルコメント-[E・G・ホワイト・コメント] 1巻 1100)

パロは神の御霊の大いなる御業を見た。神の僕によって主が行われた奇跡を見たが、神の命令に従うことを拒んだ。反抗的な王は誇らしげにこう言った、「主とは一体何者か。わたしがその声に聞き従わなければならないのか。わたしがその声に聞き従ってイスラエルを去らせなければならないのか」(出エジプト 5:2)。神の裁きがますます重くのしかかると、彼は頑強に抵抗した。天からの光を拒む事によって彼はかたくなになり、無感覚になっていった。神のみ摂理がその力を現していた。そして、認められることのなかったこれらの啓示が、更に大きな光に対してパロの心をかたくなにしていった。明確に述べられた神の意思よりも自らの思想を高める者たちは、パロのように、「主とは一体何者か……」と言っているのである。光を拒むすべての行為は心をかたくなにし、理解力を暗くする。こうして人々は、正誤の識別がますます困難になり、ますます大胆に神の意思に抵抗するのである。(同上 1099, 1100)

一度、試みに負けた者は、二度目にはさらにたやすく屈服する。罪をくり返すたびに抵抗する力は弱まり、目は暗くなり、確信は消え去る。まかれた放縱の種はみな実を結ぶ。神は、その収穫を妨げるために奇跡を行なうようなことはなさらない。……神の真理に対して神を恐れぬ不敵さと、愚かな無関心を示すものは、彼自身がまいたものの収穫を刈り取っているのである。こうして、多くの者は、かつて彼らの魂をゆり動かした真理を、冷たい無関心な態度で聞くようになるのである。彼らは、真理に対して怠慢と反抗の種をまき、そのような収穫を刈り取るのである。(人類のあけばの上巻 307)

3月24日

心をかたくなにする

「しかし、主がパロの心をかたくなにされたので、彼はイスラエルの人々を去らせなかった。」(出エジプト 10:20)

主はどのようにして人の心をかたくなにされるのだろうか。パロの心がかたくなになったのと同じ方法である。神はこの王に警告と憐れみのメッセージを送られたが、王は天の神を認めることを拒み、神のご命令に服従しようとはしなかった。彼は「わたしがその声に聞き従わなければならない主とはいったい何者か」と言った。

主は王の前でしるしと不思議を行って、ご自分の力について証拠を示された。「わたしはある」という偉大なお方がパロに、ご自分が天と地の支配者であることを示しつつその力ある業を知らされたが、王は天の神を無視する方を選んだ。王は、自分が光を受ける可能性のあった諸王の王であられるお方のみ前ですら、自分の誇りにみちた頑固な心を砕くことに同意しようとはしなかった。なぜなら彼は自分自身の道を行き、反抗しようと決めていたからである。彼は自分の意志を貫くことを選び、神のご命令を無視してエホバが、諸国のすべての神々にまされた方であり、すべての賢者、魔術師にまされた方であることを示されたその証拠そのものが、彼の思いを盲目にし、その心をかたくなにした。

パロが最初の災いで与えられた神の力の証拠を受け入れていれば、続いて起った災いはすべて与えられなかったであろう。しかし彼の固く決心した頑固さが、さらに大きな神の力のあらわれを招き、ついには彼自身の初子と同族の初子の死に顔を見るようにと言われるまで、災いにつぐ災いに見舞われたのである。そしてその間王が奴隷だと見なしていたイスラエルの子らは、災いにも害を受けず、滅びの天使が触れることもなかった。神はご自分の恩寵が誰にあるか、ご自分の民が誰であるかを明らかにされた。(手紙 31, 1891 年)

エジプトの君主は、神の力の更なる証拠に抵抗するたびに、さらに頑強に神に刃向かっていくようになっていた。……これは、聖霊に対する罪についてのはっきりした実例である。「人は自分がまくものを、刈り取ることになる。」徐々に主は御霊を取り去られた。その抑制力を取り除いて、主は王を最悪の君主である自我に任せられた。(SDA バイブルメンタリー [E・G・ホワイト・コメント] 1 巻 1100)

ついに自由

「こうして主はその民を導いて喜びつつ出て行かせ、その選ばれた民を導いて歌いつつ出て行かせられた。」(詩篇 105:43)

イスラエル人は、腰を引きからげ、足にくつをはき、手につえを取って黙々と畏敬の念をいだいて立ち、王からの出発の命令を今か今かと待っていた。彼らは、夜が明ける前に出発した。……

数百年前にアブラハムが幻によって啓示された歴史の期間が、この日に終わりを告げた。「あなたの子孫は他の国に旅びととなって、その人々に仕え、その人々は彼らを四百年の間、悩ますでしょう。しかし、わたしは彼らが仕えたその国民をさばきます。その後かれらは多くの財産を携えて出て来るでしょう」(創世記 15:13, 14)。(人類のあけぼの上巻 323, 324)

主は、イスラエルをエジプトから導き出して、再び主の力とあわれみをお示しになった。どれい境遇からイスラエルの人々を解放するという驚くべきみわざと、彼らを荒野の旅路の間お導きになったことはただ単に彼らのためばかりではなかった。それはまた周囲の諸国に対して実物教訓となるためであった。主は人間のあらゆる権威と偉大さをしのぐおかたとしてご自分をあらわされた。神の民のために神がおこなわれたしるしと不思議とは自然を超越した神の力を示し、いかに偉大な自然崇拝者をも越えた神の力を示した。神は終わりの時代に地上をお通りになるのであるが、それと同じように、高慢なエジプトの地を過ぎゆかれた。この偉大な「わたしは有る」というおかたは、火とあらしと地震と死のうちに神の民をあがなわれた。神は彼らをどれい地から連れ出された。神は「あの大きな恐ろしい荒野、すなわち火のへびや、さそりがいて、水の無い、かわいた地」の旅を導かれた(申命記 8:15)。神は「堅い岩」から水を出し、「天の穀物」で彼らを養われた(詩篇 78:24)。「主の分はその民であって、ヤコブはその定められた嗣業である。主はこれを荒野の地で見だし、獣のほえる荒れ地で会い、これを巡り囲んでいたわり、目のひとみのように守られた。わしがその巢のひなを呼び起し、その子の上に舞いかけり、その羽をひろげて彼らをのせ、そのつばさの上にこれを負うように、主はただひとりで彼を導かれて、ほかの神々はあずからなかった」とモーセは言った(申命記 32:9-12)。こうして神は、いと高き者の陰に宿らせるために、彼らをみもとにひき寄せられたのである。(キリストの実物教訓 265)

3月26日

雲と火

「主は雲をひろげておおいとし、夜は火をもって照された。」(詩篇 105:39)

主は彼らの前に行かれ、昼は雲の柱をもって彼らを導き、夜は火の柱をもって彼らを照し、……目に見えない指導者の旗じるしが、いつも彼らのそばにあった。昼は、雲が彼らの旅路を導き、また、イスラエルの軍勢の頭上に天蓋のようにひろがっていた。それは、焼けるような熱から保護する役目を果たし、その涼気と湿度は、かわききって干からびたさばくの中で、生気を回復させるものとしてまことにありがたいものであった。夜になるとそれは火の柱になって、彼らの天幕を照らし、たえず主のご臨在をあかししていた。

イザヤの最も美しく、慰めに満ちた預言の言葉のなかで、この雲と火の柱は、悪の勢力との最後の大争闘において、神が、神の民を守られることの象徴として用いられている。「その時、主はシオンの山のすべての場所と、そのもろもろの集会との上に、昼は雲をつくり、夜は煙と燃える火の輝きとをつくられる。これはすべての栄光の上にある天蓋であり、あずまやであって、昼は暑さをふせぐ陰となり、また暴風と雨を避けて隠れる所となる」(イザヤ 4:5, 6)。(人類のあけぼの上巻 325)

わたしたちの前にある試練の時、保護についての神の堅い約束が、このお方の忍耐の言葉を守っている人々の上に置かれる。キリストは忠実な者に向かって「さあ、わが民よ、あなたのへやにはいり、あなたのうしろの戸を閉じて、憤りの過ぎ去るまで、しばらく隠れよ」と言われる(イザヤ 26:20)。その恵みを拒む者にはまことに恐ろしいユダのししも従順な者、忠実な者には神の小羊である。神の律法に違反する者には怒りと恐怖を示す雲の柱も、このお方の戒めを守っている者には光と憐れみと救出を語る。逆らう者を打ちすえる力強い腕は、忠実な者を解放するのに力強いのである。忠実な者はみな確かに集められる。「また、彼は大きなラッパの音と共に御使たちをつかわして、天のはてからはてに至るまで、四方からその選民を呼び集めるであろう」(マタイ 24:31)。(教会への証 6巻 404)

安全な道

「主はモーセに言われた、『あなたは、なぜわたしにむかって叫ぶのか。イスラエルの人々に語って彼らを進み行かせなさい。』」(出エジプト 14:15)

神は、み摂理のうちにヘブル人を海に面した山の中に導かれたが、それは、神が彼らを救う力を示し、彼らを圧迫するものの誇りをあからさまにくじくためであった。神は別の方法を用いて彼らを救うこともできたが、彼らの信仰を試み、神に対する彼らの信頼を強めるために、この方法をお選びになった。人々は疲労し、恐怖に満たされていた。しかし、モーセが前進せよと命じたときもし彼らがためらっていたならば、神は彼らのために道を開くことをなさなかったであろう。「信仰によって、人々は紅海をかわいた土地をとおるように渡った」(ヘブル 11:29)。彼らは、水の中を進んで行くことによって、モーセを通してお語りになった神の言葉を信じていることを示した。彼らが力のかぎり尽くしたときに、イスラエルの力ある神が海を分けて、彼らの歩む道をお作りになった。

ここに教えられている驚くべき教訓は、いつの時代にもあてはまるのである。クリスチャンの生涯は、しばしば危険にさらされ、義務を果たすことが困難に思われる。われわれは、前方には滅び、後方には束縛や死が迫っているように考える。それにもかかわらず、神のみ声は明らかに「前進せよ」と語っている。われわれの目が、暗黒を貫いて見るができなくても、また、冷たい波を足もとに感じて、われわれはこの命令に従わなくてはならない。われわれの前進を妨げる障害物は、ためらったり疑ったりしては取り去られることはない。すべての不安のかげが消えうせ、失敗や敗北の危険が全くなくなるまで服従をのぼすものは、絶対に服従することはない。「障害物が取り除かれて、われわれの道が明らかに見えるようになるまで待とう」と不信はささやく。しかし、信仰はすべてを望み、すべてを信じておおしく前進することを勧める。

エジプト人にとって、暗黒の壁であった雲は、ヘブル人には全陣営を照らし、彼らの行く手に光を投げかける大いなる照明の光であった。そのように摂理のうちになされることは、信じない者には暗黒と絶望をもたらすが、信じ、よりのむ魂には輝く光明であり、平和である。神がお導きになる道は、荒野や海を通っているかも知れないが、安全な道なのである。(人類のあけぼの上巻 333, 334)

3月28日

モーセと小羊の歌

「主はわたしの力また歌、わたしの救となられた、彼こそわたしの神、わたしは彼をたたえる、彼はわたしの父の神、わたしは彼をあがめる。」(出エジプト 15:2)

一夜のうちに彼らは最も恐ろしい危機から完全に救われたのであった。彼らは、戦いに不慣れた奴隷の無力な大群衆で、女子、子供、家畜などがかかえ、前方は海に面し、後方からは強力なエジプトの軍勢の追跡を受けた。しかし、彼らは水を分けて開かれた進路を見、彼らの敵が勝利を目前にしていながら、波にのまれてしまったのを見た。主だけが彼らを救われたのである。彼らは感謝と信仰にみたされて、主に心を向けた。彼らは、心の喜びを歌と賛美であらわした。神の霊が、モーセに臨んだので、彼は人々を指揮して勝利を感謝する賛美の歌をうたわせた。この賛美は最も古く、われわれが知っている賛美の歌の中では、最も荘厳なものの一つである。……

この歌は、ユダヤ民族だけのものではない。それは義の敵がすべて滅び、神のイスラエルが最後に勝利をおさめる未来をさし示している。パトモスの預言者は、白い衣をまとった多くの人々が敵に「うち勝」ち「神の立琴を手にして」、「火のまじったガラスの海」のそばに立っているのを見た。「彼らは、神の僕モーセの歌と小羊の歌とを歌つ」た(黙示録 15:2, 3)。……

神は、われわれの魂を罪の束縛から解放することによって、紅海でヘブル人にお与えになったものよりはるかに大いなる解放をもたらしてくださるのである。われわれも、ヘブルの軍勢のように、真心から主を賛美し、「人の子らになされたくすしきみわざ」に対して、声をあげなければならない。神の大いなるあわれみを深く思い、神から与えられるさまざまのほかの小さな賜物をもたいせつにする者は、喜びの帯をつけ、その心のうちに主に対する音楽をかなでるのである。われわれが神のみ手から受ける日ごとの祝福と、なにものにもましてわれわれに幸福と、天国とを得られるようにしてくださったイエスの死は、われわれの絶えない感謝の主題でなければならない。……

天の全住民は一つになって神を賛美している。われわれが彼らの輝く列につらなるときにそれを歌えるように、今、天使の歌を学ぼう。(人類のあけぼの上巻 329 - 333)

再びつぶやく

「その荒野でイスラエルの人々の全会衆は、モーセとアロンにつぶやいた。」(出エジプト 16:2)

イスラエル人の経験をふりかえてみて、彼らの不信とつぶやきに驚き、自分たちであつたら、あんなに忘恩的にはならなかつただろうと思う人たちが多し。しかし、彼らの信仰がちょっとした試みによつてためされてさへ、彼らは古代イスラエルと同じように信仰も忍耐も発揮しないのである。(人類のあけぼの上巻 338)

神は、彼らの神となつて、彼らをご自分の民とし、彼らをもつと広く、もつとよい国へ導くと約束されたのに彼らは、その国へ行く途中、妨害に出会うたびにすぐ失望した。……

彼らはエジプトでの苦しい仕事を忘れた。奴隷の境遇から救済されたときに彼らのために神の恵みと力があらわされたことを彼らは忘れた。死の天使がエジプトの長子を全部殺したときに、イスラエルの子らは生かされたことを彼らは忘れた。彼らが開かれた道を安全に渡つたときに、追跡してきた敵の軍勢が海の水にのまれて滅びたことを、彼らは忘れた。彼らは、目の不便と試練だけを目にとめてそれを感じた。そして、「神はわれわれのために大いなることをしてくださつた。われわれは奴隷であつたのに、神はわれわれを大いなる国民にしてくださるのだ」と言わないで、彼らは、途中の困難について語り、このたいくつな放浪はいつ終わるのだろうと思つた。

イスラエルの荒野生活の歴史は、世の終わりの神のイスラエル人の益のために記録された。荒野の放浪者たちがあちらこちらへさまよつて、飢え、かわき、疲れたときに、彼らの救済のために神の力がいちじるしくあらわれたことなどの神の行為の記録は、すべて各時代の神の民に対する警告と教えに満ちている。ヘブル人のいろいろな経験は、彼らがカナンに約束の地へはいるための準備の学校であつた。神は、今日の神の民が、古代イスラエル人の経験した試練を、へりくだつた心と教えを受ける精神をもつてふりかえり、天のカナンにはいる準備に役立てるように望んでおられる。(同上 337, 338)

3月30日

天に向かって手を

「男は、怒ったり争ったりしないで、どんな場所でも、きよい手をあげて祈ってほしい。」(テモテ第一 2:8)

イスラエルの不従順と神からの離反のゆえに、彼らは狭い場所に連れていかれ、災難に苦しむままにされた。彼らの敵は彼らと戦い、彼らを卑しめ、困難と失望の中で彼らが神を求めるよう導くことを許された。

イスラエルがアマレク人に襲撃された時、モーセはヨシュアに敵と戦うよう指示した。(教会への証 2 巻 106-108)

モーセとアロンとホルは、戦場を見おろす丘の上に場所を占めた。モーセは、右手に神のつえを持って、両手を天にさし出し、イスラエル軍の成功を祈った。戦闘が進むにつれて、モーセの両手が上のほうへさし上げられている間は、イスラエルが勝ったが、彼の手が下がると敵が勝つことがわかった。モーセは、疲れたので、アロンとホルが太陽の沈むころまでその手をささえて、敵を敗走させた。

アロンとホルは、モーセの手をささえて、モーセが、神から人々に語る言葉を受けている間に、人々は彼の困難な働きをささえなければならないことを彼らに示していた。モーセの行為もまた意味深いもので、神が、人々の運命をそのみ手ににぎっておられることを示した。すなわち、人々が神に信頼するときに、神は彼らのために戦って敵を征服されるが、人々が神にたよらないで自分自身の力にたよるときに、彼らは、神を知らない人たちよりも弱くなり、敵は彼らを打ち負かすのであった。

モーセが、手を天に向かってさしのべ、民のためにとりなしているときにヘブル人が勝利したように、神のイスラエルは、信仰によって、偉大なる助け手の力にたよるときに勝利するのである。しかし、神の力は人間の力と結合しなければならない。モーセは、イスラエルが活動しなければ、神は、敵を打ち負かしてくださらないと思った。大指導者モーセが主に訴えている間、ヨシュアとその勇敢な部下たちは、イスラエルと神の敵を撃退するために全力を尽くしていた。(人類のあけぼの上巻 346, 347)

神のための二つの手

「わたしたちはまた、神と共に働く者として、あなたがたに勧め。神の恵みをい
たずらに受けてはならない。」(コリント第二 6:1)

主は山上で幕屋の建設に関してモーセに指示を与えられた時、すべての時代
におけるご自分の民に対して重要な教訓を与えられた。その働きの中で主は細部
にわたってすべてにおいて完全を要求された。モーセはエジプト人の学識すべて
に熟達していた。彼は神についての知識があり、神のご目的が幻のうちに彼に示
された。しかし彼はどのように刻み、刺繍するかは知らなかった。

イスラエル人はずっとエジプトの奴隷として過ごしていたので、彼らのうちには
器用な者がいたけれども、幕屋の建設に召されるほどの細密な技術を教えられ
てはいなかった。彼らはレンガを造ることは知っていたが、金や銀をどのように
扱うか分らなかった。その働きはどのようになされるべきであろうか。……

そこで神ご自身が、その仕事をどのように成し遂げねばならないかを説明され
た。神はある特定の仕事をさせようと思っておられるその人物の名を知らされた。
ベザレルが製作者になるのであった。この人はユダ部族、すなわち神が栄誉を与
えておられる部族に属していた。……

主はモーセに言われた、「見よ、わたしはユダの部族に属するホルの子なるウ
リの子ベザレルを名ざして召し、これに神の霊を満たして、知恵と悟りと知識と
諸種の工作に長ぜしめ、工夫を凝らして金、銀、青銅の細工をさせ、また宝石
を切りはめ、木を彫刻するなど、諸種の工作をさせるであろう。見よ、わたしは
またダンの部族に属するアヒサマクの子アホリアブを彼と共にらせ、そしてすべて
賢い者の心に知恵を授け、わたしがあなたに命じたものを、ことごとく彼らに造ら
せるであろう」(出エジプト 31:2-6)。(SDA バイブルコメンタリー [E・G・ホイト・コメント] 1
巻 1108)

群衆の中には、このような仕事の監督を務めたことがあり、それがどのよう
になされるべきかを完全に理解していたエジプト人がいた。けれども働きは、彼ら
に依存しなかった。主は、人間という器と結合なさり、巧みに働く知恵を彼らに
与えられた。(SDA バイブルコメンタリー [E・G・ホイト・コメント] 1 巻 1108)

一般的芸術における技術は神からの賜物である。神は賜物としてその賜物
を正しく使う知恵の両方を備えられる。(手紙 60, 1907 年)

地上の幕屋は天の幕屋を象徴することができるために、どの部分もすべて完
全でなければならず、最も細部に至るまで天の型通りでなければならない。天の
目に最終的に受け入れられる人々の品性もそうである。(両親、教師、生徒への
勧告 60)

今日、神の務めにおいて働きを完璧にこなすことのできるよう、働き人に、知
恵と鋭い洞察力を神に祈り求めさせなさい。((SDA バイブルコメンタリー [E・G・ホイト・コ
メント] 1 巻 1108)

研究 2

わたしたちが信仰の一致に到達するまで



「いのちの目的」

「父よ、あなたがわたしに賜わった人々が、わたしのいる所に一緒にいるようにして下さい」—これが、人を造られた当初から変わらない神様のご目的でした。罪が「神との間を隔て」（イザヤ 59:2）、人が「みな羊のように迷って、おのおの自分の道に向かって行った」後でさえ（イザヤ 53:6）、このお方は少しもご目的を変えることをなさいませんでした。ここにわたしたちの希望があります。これを実現に至らせるのがエペソ 4 章 13 節の約束、すなわち「神の子を信じる信仰の一致」と「彼を知る知識の一致」、ひいては「キリストの満ちみちた徳の高さにまで至」らせる約束です。信仰によってこの高さに引き上げて下さるようまごころから祈りつつ、まず、1) いのちの目的から見ていきましょう。

1. いのちの目的

目的があるときにはじめて人には生きる意味があります。例えば、旅に出る人のことを考えてみましょう。目的地がある、あるいは目的地を知っているということは大切でしょうか？目的地のない人が、一歩家を出ると、出たときからさまよい始めることになります。始めは興味の向くままに進み、楽しく感じるかもしれませんが、どれほど進んでも、どれほど時間が経っても、どこにも到着しません。そして「その終りはついに死に至る」ことになります（箴言 14:12）。実際、そのような人生行路もめずらしくありません。あるいは自分は目的地に向かっていると思う場合でも、もしその目的地が誤っていたら、どうでしょうか？それは放蕩息子が父親の家を出て行ったときの旅に似ています（ルカ 15 章参照）。

残念なことに、クリスチャンと言われる多くの人が、目的なくひしめき合う「群

衆」の中にいます(ルカ 8:45)。その群衆の中でも、イエスは「信仰の接触」を識別されました。しかし、群衆の中にいる人は、まだイエスを見ていないのです。すぐそばにしながら、目的がないためにさまよい、失われてしまいます。しかし、目的があってイエスの許へ来た人は、このお方にさわりました。彼女はこの目的のために、まず実際にイエスのみ許へ行かなければなりませんでした。

目的があるとき、ものごとは単純になります。一つしか考えませんし、その一事を得るために他のことは二の次になります。ちょうど食べ物を与えられるまで、あるいは母親に抱かれるまで求め続ける幼子のように単純です。

また目的があるとき、焦点を合わせた生活を送ることができます。目的があるかどうかは、いざという時にわかります。何かがあると騒ぐ人や、いろいろな人に話しまわる人は、目的がわかっていない人です。

では、わたしたちの目的は何でしょうか?それは人によって異なるものでしょうか。パウロは次のように述べています。「御子は、見えない神のかたちであって、すべての造られたものに先だって生れたかたである。万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も、みな御子にあって造られたからである。これらいつさいのものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである。彼は万物よりも先にあり、万物は彼にあって成り立っている」(コロサイ 1:15-17)。

万物とあります。従って、この中に含まれないものはありません。自分もその中に含まれています。そして万物は、「御子にあって」「御子によって」「御子のために」造られたのです。つまり、存在するすべてのものの根源と目的が「御子」にあるということです。このお方がおられるから、自分の存在があるのです。ですから、このお方に焦点が合っている、すなわち目的がわかっている人は、何があってもこのお方に目を向け、このお方に話します。「ながめよ、イエスを。あおげよ、み顔を。世の栄え失せゆきぬ。み恵みの光に」とあるとおりです。

目的があるとき、人は強くなります。なぜ自分がそこにいるかがわかるからです。それがわからないと、イエスが近くに来て下さっても祝福を得ることができません。しかし、「自分の神を知る民は、強い」のです(ダニエル 11:32 欽定訳)。彼らは、「疲労と遅延と飢えに耐えることのできる」強い信仰を持っています(各時代の大争闘下巻 395)。

そうです、目的は人が作るものではなく、人を造られたお方、すなわち「御子」

にあるのです。その目的を知るとき、はじめて「永遠の命」のために準備することができます。「すべてわが名をもってとなえられる者をこさせよ。わたしは彼らをわが栄光のために創造し、これを造り、これを仕立てた」(イザヤ 43:7)。

しかし、「すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており」(ローマ 3:23)、つまり、目的を果たしていないのです。この目的を認めず、もし人の目的が、食べること、寝ること、運動することに限定されているなら、食用の牛と何か変わるところがあるでしょうか？

「だから、飲むにも食べるにも、また何事をするにも、すべて神の栄光のためにすべきである」(コリント第一 10:31)。本来、神の栄光のために生きるのが人であり、そのとき、真に目的を持った人生となります。

「神の栄光のために」とは？

それでは神の栄光のためには、どういう意味でしょうか？まず栄光は旧約で、光として表されています。光のためにはともしびと油が必要ですが、ともしびはみ言葉であり(詩篇 119:105)、油は聖霊とあります(ゼカリヤ 4:6)。そして新約になると、イエスが次のように言われました、「あなたがたは、世の光である」。「山の上にある町は隠れることができない。また、あかりをつけて、それを柵の下におく者はいない。むしろ燭台の上において、家の中のすべてのものを照らせるのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい」(マタイ 5:14-16)

「天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい」、すなわち「神に栄光を帰せよ」と言われます。栄光は、自分が持つものではなく、神に帰すべきものです。そのためには自分にともしびと油が必要です。

み言葉が聖霊によって理解されるとき、そこに「光」があります。この光が、黙示録 18:1 にある全地を照らす光です。「わたしは、もうひとりの御使が、大いなる権威を持って、天から降りて来るのを見た。地は彼の栄光によって明るくされた」(黙示録 18:1)。「大いなる力」すなわち、聖霊の力を受けて地をその栄光で照らすのは、み言葉のともしび、すなわち「神の戒め」と「イエスのあかし」を持っている民です。その光を神に帰すときに「栄光」となります。「神の栄光のために」しなさい、「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるように

しなさい」とある通りです。

光を英語では light と言いますが、理解させることを enlighten と言います。light に en が付加されているこの en には元の言葉を動詞にする働きがあります。「光」が「光になる」。神の栄光を理解するときに光になり、光になると人に理解を与えるようになります。

「主のさとしは正しくて、心を喜ばせ、主の戒めはまじりなくて、眼を明らかにする (enlightening the eyes)」(詩篇 19:8)。まじりない主の言葉 (light) は、理解を与えます (enlighten)。人は、まことの光である神の栄光を理解するとき、光になるのです。

この目的がはっきりしているとき、その光を得るという目的を達成するために必要な過程を選ぶようになります。神に「わたしのしもべヨブのように全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者の世にない」と証されたそのヨブは、目的に到達する過程について何と述べているのでしょうか。「しかし彼はわたしの歩む道を知っておられる。彼がわたしを試みられるとき、わたしは金のように出て来るであろう」(ヨブ 23:10)。「彼はわたしの歩む道を知っておられる」という信仰によって、「試みられる」過程を経るとき、「わたしは金のように出てくる」という目的に達することを知っていました。つまり、ヨブは目的を知っていたのです。そして、その目的と過程が「彼」にあることを知っていました。

- いのちの目的を知っておられるのは、神である。
- その目的に達する手段は、信仰である。つまり、信仰を持つとは目的を持つことである。
- そして信仰とは、御子がわたしを知っておられることを知ることである。

このヨブの経験が、light から enlighten へ進む経験です。神が自分のために持っておられる目的 (光) をそのまま受けるとき、自分の話をはさまず、人々にこれを教えることができます。今回は、さらに目的とそのための過程の事例をみていきましょう。

が、彼の改心的手段になりました。カルバリーでの出来事と、イエスさまによって発せられた言葉は、シモンを導き、このお方を神の子として受け入れさせたのでした。

十字架の場所に着くと、死刑囚たちは拷問道具に縛り付けられました。二人のどろぼうたちは自分たちを十字架につけようとする者たちの手の中で暴れました。しかし救い主は抵抗されませんでした。

イエスさまの母はカルバリーへの恐ろしい道のりをこのお方についていきました。彼女はイエスさまが疲れ果ててご自分の重荷の下に沈み込んだときにこのお方を助けたいと切望しました。しかし彼女はこの特権は許されませんでした。

その疲労の道のりの一步ごとに、彼女はこのお方がご自分に与えられた神からの力を表し、そしてご自身を殺人者の群衆から解放なさるのを期待して見ていました。そして今、最後の場面に着き、彼女は泥棒たちが十字架に縛られるのを見ました。なんという不安な苦悩を彼女は耐えたことでしょうか！

死人を生きかえらせたお方が、十字架にかけられるがままになるのでしょうか？神の御子がこんなにも残酷な殺され方をされるがままになるのでしょうか？彼女はこのお方がメシヤであられるという信仰をあきらめなければならぬのでしょうか？

彼女はこのお方の御手が十字架上に広げられるのを見ました。その御手はこれまで苦しんでいる者を祝福するために差し出されてきたのでした。金づちと釘が持つてこられ、大きな釘が柔らかい肉に打ち込まれると、心の傷ついた弟子たちは失神しかかっているイエスさまの母をこの残酷な光景から連れ出しました。

救い主は一言も不平をもらされませんでした。このお方のみ顔は相変わらず青ざめ、穏やかでありましたが、大粒の汗がその額にたまっていました。このお方の弟子たちはこの恐ろしい光景から逃げてしまいました。このお方は一人で酒ぶねをふまれ、もろもろの民の中に彼と事を共にするものはありませんでした（イザヤ 63:3）。

ねぎ餅

□材料

ねぎ	3 本
玄米餅	4 つ
ごま油	適量
しょう油	適量

□作り方

1. ネギを青いところまですべて細く斜め切りにして、フライパンに敷きつめ、ごま油をひとまわしします。
2. その上にお餅を等間隔におきます。
3. 火にかけ、ふたをして、とろ火にします。
4. 10 分 -15 分そのままにして、お餅がやわらかくなったら、下のねぎと一緒に皿に移します。
5. 食べるときに、しょう油をかけて食べます。

ねぎをたっぷり入れるのがおすすめです。とろとろに甘くなって、おいしいですよ。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究 : 14:00-15:00

【公開放送】 <http://www.4angels.jp>



聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理



お申込先 : 〒350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係
是非お申し込み下さい。

書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



イエスの物語

第48話 カルバリー(1)

イエスさまは群衆の叫びややじに囲まれながら、カルバリーへとせかされました。このお方がピラトの邸の門を通られると、バラバのために用意されていた重たい十字架が、このお方の傷ついて血の流れる肩に乗せられました。十字架はまた二人のどろぼうたちの上にも置かれました。彼らはイエスさまと同じ時に処刑されることになっていました。

この荷は弱り苦しんでおられた状態にある救い主には重すぎました。イエスさまはほんの数歩も歩かないうちに、十字架の下に気を失って倒れておしまいになりました。

このお方が起き上がったとき、十字架はまたこのお方の肩に置かれました。このお方はよろめきながら数歩すすまれましたが、また気を失って地面に倒れてしまいました。迫害者たちは、今やこれ以上イエスさまがこの重荷をもって先へ進むことはできないことに気づきました。そして彼ら

はこの屈辱的な重荷を運ぶ者を探すのに困惑しました。

ちょうどその時、彼らはクレネ人シモンが反対方向からやってくるのに出会いました。彼らはシモンを捕えて、無理やりカルバリーへと十字架を運ばせました。

シモンの息子たちはイエスさまの弟子でしたが、彼自身は救い主を受け入れてはいませんでした。シモンはその後ずっと贖い主の十字架を背負った特権に感謝しました。彼がこのようにむりやり運ばされた重荷



(45 ページに続く)